

まほろん令和7年度

第5回

館長講演会



日本歴史の扉を開いた遺跡(4)

群馬県 岩宿遺跡

— 旧石器時代 —

まほろん館長 石川日出志

令和8年2月21日(土) まほろん講堂 13:30~15:00

13:00 受付開始・開場

日本歴史の扉を開いた遺跡を語る 第4回

旧石器時代—群馬県岩宿遺跡—

まほろん館長 石川 日出志

【導入】 戦前、日本歴史は縄文時代から始まると考えられていました。ところが1949年に岩宿遺跡が発掘されて、日本列島にも縄文時代以前の人類文化が実在することがわかりました。旧石器時代文化です。岩宿遺跡の調査の経過や成果がどのようなもので、どのような議論があったのかを紹介します。岩宿に始まる旧石器時代文化の理解は、日本列島を舞台とする歴史を地球規模で考える上でとても重要なことです。

1. 戦前は「日本列島の歴史は縄文時代から」と考えられていた

(1) 戦前は「縄文文化＝先住民の文化」と扱われた。

- ・日本歴史の始まりは記紀（日本書紀・古事記）で説かれ、縄文＝石器時代文化は先住民の文化と教えられた。例えば、1936年に雑誌『ミネルヴァ』誌で、東西日本で大きな時期差なく縄文時代から弥生時代へと移行したとみる山内清男に対して、古代史の喜田貞吉が東北では平安時代まで先住民の縄文文化が残存したと反論して論争に（ミネルヴァ論争）。
- ・考古学者はおおむね「縄文時代→弥生時代→古墳時代」の変遷を承認し、縄文文化が日本歴史の始まりとみていた。（例）金関丈夫ほか1937『日本文化史大系1 原史文化』誠文堂新光社）

(2) 「地山」という語： 無遺物＝人類登場以前の時代の土層、の意。

- ・参考： 広辞苑＝②（盛土などに対して）自然の丘陵。その土地本来の山。（①③略）
- ・戦前は、黒土（縄文時代以後）を掘り下げてローム層に達すると発掘は終了した。
- ・1941年白崎高保： 縄文土器最古の型式「稲荷台式土器」はローム層最上部と黒土の境目付近から出土する。（重要遺跡を白崎らが調査したために山内が激怒。） 【1】

2. 群馬県岩宿遺跡の発掘調査

(1) 相沢忠洋（1926.6.21-1989.5.22）の岩宿遺跡の発見

- ・鎌倉生まれ→桐生（土器・石器に出会う）→浅草（帝室博物館守衛数野甚造との出会い）→応召→復員後桐生へ。赤城山南麓で遺跡を探究。
- ・1946年初秋、琴平山と稲荷山間の切通しで石片発見。人工遺物と判断。 【2】
- ・1949年7月、定型的石器（のち槍先形尖頭器／黒曜石製）発見。
→ 7月27日芹沢長介（1919.10.21-2006.03.16／当時明大学生）が見て重要と判断、静岡市登呂遺跡調査中の杉原荘介（1913.12.06-1983.09.01／当時明大助教授）に手紙で情報伝える。
9月8日相沢資料持参し杉原が実見。予備調査のため9月10日桐生入（越中屋旅館泊）。

(2) 3回にわたる発掘調査で得られた事実

①. 発掘調査： 【3・9上】

- ・予備調査（1949年9月11日～13日）、第1次調査（1949年10月2日～10日）、第2次調査（1950年4月11日～20日）
- ・石器の出土層位を逐次確認するために、土層を縦にスライスする発掘法を採用。平面的な

広がりが見せない点を犠牲にしても層位を重視。遺物が数メートルの範囲内と把握。

- ・調査研究報告： 杉原荘介 1956『群馬県岩宿発見の石器文化』明治大学文学研究所
邦文 52 頁・英文 25 頁。欧米の旧石器研究者に寄贈。これをもとに国際研究交流へ。
私見：鳥居龍蔵に憧れた杉原が、鳥居に近づけたと感じたのではないか。

②. 調査で得られた事実： 三つの層位から異なる石器群「石器文化」 【4～6】

- a) 岩宿Ⅰ石器文化： 頁岩製の大型石器＝hand-axe（握斧）・side scraper（削器）・end scraper（搔器）・flakes（剥片）。
- b) 岩宿Ⅱ石器文化： チャート製の小形石器＝side scraper（削器）・end scraper（搔器）・point（尖頭器）等。
- c) 岩宿Ⅲ石器文化： 黒曜石製の小形石器＝end scraper（搔器）・point（尖頭器）等。
- d) C地点： 最上層の黒色土層から稲荷台式土器（当時最古の縄文土器型式）・押型文土器と石鏃。

* 石器の実測図とその見方* 【5・6】

スケッチから実測図へ。実測図は石器の形態と製作情報を表現したもの。

③. 調査成果の要点

- a) 縄文土器最古の稲荷台式土器の下層で確認された石器文化である＝縄文時代以前。
- b) 石器群にまったく土器・石鏃を伴わない＝無土器文化。
- c) 縄文時代以前に異なる特徴をもつ数段階の石器文化が存在する＝時代が長期間であることを示唆。
- d) 関東ローム層中に縄文時代以前の人類文化が存在するという常識を打破した。
- e) 現在の位置づけ： ホモ・サピエンスの出アフリカから全世界への拡散 【8下】

④. 調査成果の評価は賛否両論 【7】

- ・山内清男＝否定： 桐生市千網谷戸遺跡出土土器の分類指導の折に宿舎に怒鳴り込む。
→ これは近隣の普門寺遺跡の調査情報を根拠とするもの（藺田 1954 参照）。
- ・山内と並ぶ縄文時代研究の八幡一郎・甲野勇も否定（大塚 2014）
- ・賛否が併存する辞書（京大『図解考古学辞典』）：小林行雄＝肯定、藤岡謙二郎＝否定的
- ・しかし、関東・中部の各地（やがて全国）でローム層から土器を伴わない石器群が検出され、石器の特徴も縄文時代と異なることが明確となり、縄文以前と承認される。

(3) 時代名称論争： 岩宿遺跡など縄文時代以前の石器群は何時代なのか？ 【8中】

- a) 先縄文時代： 八幡一郎など。縄文時代以前であることに力点を置く。
- b) 先土器時代： 杉原荘介。旧石器時代とみるが、土器による時代区分名称を採用
- c) 旧石器時代： 芹沢長介など。ヨーロッパと対比。
- d) 無土器新石器時代： 山内清男。旧石器時代ではない。

(4) 岩宿に先立つ旧石器文化の探求＝いずれも達成できなかった

- a) 1908 年 N. G. Munro： 神奈川県早川流域で「旧石器」の可能性を主張。
- b) 1917 年 濱田耕作： 大阪府国府（こう）遺跡で旧石器文化を探る調査。
- c) 1931 年 直良信夫： 兵庫県明石市西八木海岸でヒトの腰骨発見（明石原人）。
- d) 1938 年 八幡一郎： 縄文文化以前にシベリア中石器時代文化波及の可能性を主張。

(5) 現在の眼で見ると

- ・石器群の典型性： A・B 地点は著しく小規模な遺跡だが、岩宿 I・II 石器文化は後期旧石器時代関東編年の第 I・III 期に特徴的な石器群。もしそれらが希薄だったら評価はなかなか定まらなかったであろう。 【8・9】
- ・遺跡の理解： 調査当時は西側の谷に向かう遺跡という理解であったが、東側一帯の調査が進み、むしろ琴平山東裾を南へ流れる小谷の谷頭をめぐる遺跡と理解するように修正された。 【8・10】
- ・岩宿遺跡調査の評価： 相沢忠洋による発見と周知、杉原荘介・芹沢長介共同による調査と分析研究によって達成されたもの。

(付) 巷間に流布する風評に関するコメント

3. 岩宿以後—ごく簡潔に—： より古い石器文化の探求から論争へ、そして・・・

- ①. 杉原荘介： 1953 年、青森県金木町藤枝溜池地点を調査 → 前・中期旧石器時代の石器群の存在に懐疑的となる。
- ②. 芹沢長介： 1962 年大分県丹生・早水台、栃木県星野などの資料から「前期旧石器時代」説提唱。1970・71 年岩宿 D 地点調査。
→ 1949・50 年にともに岩宿遺跡を調査した杉原と芹沢との間に「前期旧石器」存否論争が繰り広げられる (1965～1981 年)
- ③. 1981 年宮城県座散乱木遺跡で芹沢「前期旧石器」とは異なる石器群「検出」。1980～90 年代に宮城県内を中心に多数の同種の石器群検出。前期旧石器「存否論争」に終止符。
- ④. ところが 2000 年 11 月 5 日、毎日新聞社が③を捏造と報道。
→ 2000 年 12 月から日本考古学協会が「前・中期旧石器問題調査研究特別委員会」を組織して検証調査。すべて捏造と断定。
(＊捏造問題については、あらためて取り上げるべき問題だと考えています。)
- ⑤. 最近あらためて後期旧石器時代に先行する石器文化の存在が探求され始めた。

【参考文献】

- ・相沢忠洋 1969 『「岩宿」の発見—幻の旧石器を求めて—』講談社 (1973 講談社文庫)
- ・岩宿文化資料館 1992 (岩宿博物館 2011 改訂版) 『岩宿時代 常設展解説図録』
- ・江坂輝弥 1951 「講座 縄文式文化について—前期—」『歴史評論』12-8
- ・大塚初重 2014 『歴史を塗り替えた日本列島発掘史』(株)KADOKAWA
- ・小野昭ほか 1992 (第 5 版 2008) 『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版会
- ・白崎高保 1941 「東京稲荷台先史遺跡」『古代文化』12-8
- ・杉原荘介 1956 『群馬県岩宿発見の石器文化』明治大学文学研究所
- ・前・中期旧石器問題調査研究特別委員会 (編) 2003 『前・中期旧石器問題の検証』日本考古学協会
- ・藺田芳雄 1954 「栃木県足利郡普門寺遺跡」『日本考古学年報 2 (昭和 24 年度)』(この報文の次頁に杉原荘介「群馬県新田郡岩宿遺跡」掲載！)
- ・堤隆 2011 『列島の考古学 旧石器時代』新泉社
- ・水野清一・小林行雄 (編) 1959 『図解考古学辞典』創元社
- ・明治大学考古学博物館 (編・発行) 1987 『明治大学考古学博物館 展示図録』

東京 稻荷臺先史遺蹟

——稻荷臺式系土器の研究(一)——

I 発見より発掘までの経過

(略)

昭和十二年六月下旬であつた。上板橋方面へ早期縄文式土器を表面採集に行かうとした途上、偶然稻荷臺を通り、地均し工事をして居る所で破片の土器が露出してゐるのを発見し、之を採集歸宅後水洗して見ると、其の文様は總べて撚糸文であつたので、山内清男氏に示して教を受けたところ、氏は非常に興味を有たれ、慎重に調査するやうにとの御注意があつた。後数日にして再び遺蹟(1939年)(略)

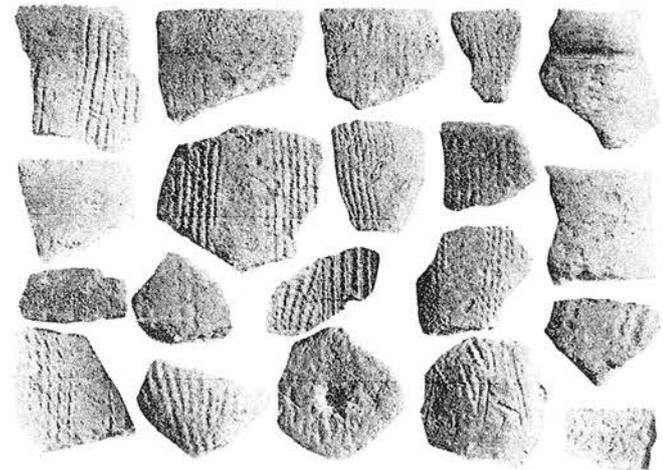
そして四月末より五月初頭に互つての發掘調査となつたのである。

V 稻荷臺式文化の位置

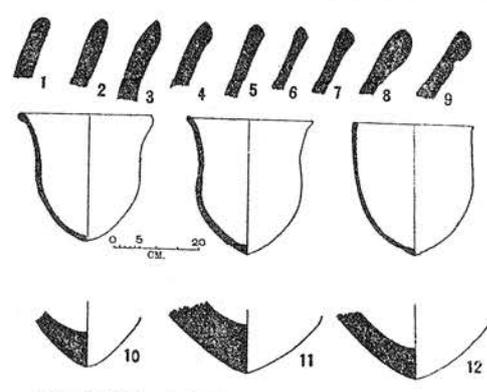
稻荷臺式文化の編年學的的位置を明確になす上には、本式と關聯ある最近発見の未發表新形式の栗原式・石神井式・赤塚式等に就いて語らねばならない。而して本稿にそれ等の各文化内容を語ることは不可能なることでありこれは稿を改めて別記することとし、此處には稻荷臺式より續くと考へられる以上の如き文化の存在することを記すに止める。

(略)

筆者は稻荷臺式土器こそ所謂廻轉押捺文土器の祖源であり、同じ縄自體の廻轉により得られ、縄文式土器の縄文の祖源であり、やがては日本縄文式文化の祖源的一形式ではないかと密かに思考する。



第五圖 稻荷臺遺蹟出土土器



白崎高保

圖四第 稻荷臺遺蹟出土土器斷面圖 (上段・下段)

板橋区稻荷台遺跡の発掘報告 (白崎高保 1941「東京稻荷台先史遺跡」『古代文化』12-8)

*この調査報告で提唱する稻荷台式土器が最古の縄文土器型式で、ローム層と黒土層の境界部で出土する。

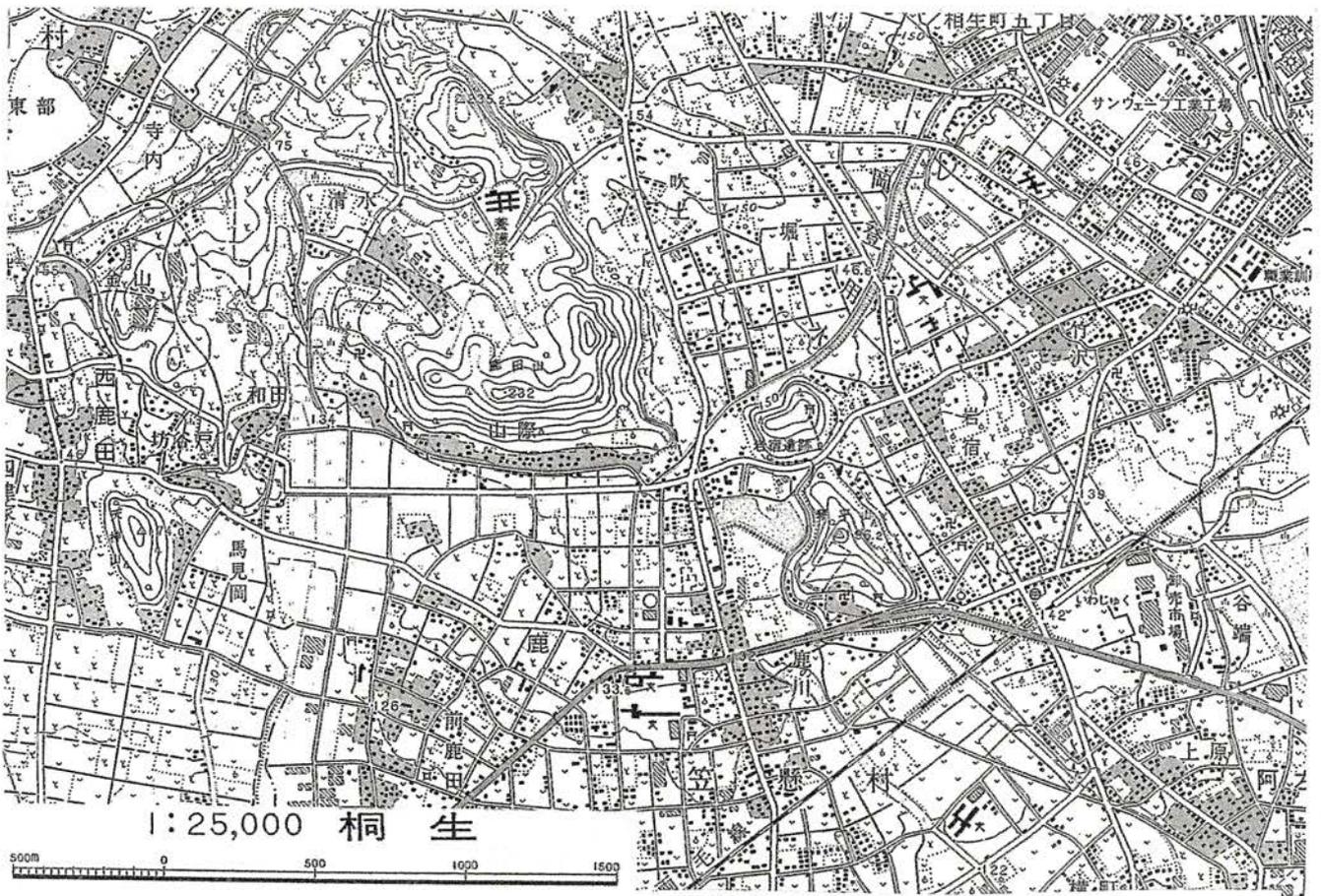
(1951.6.23改訂)
(1950.3.13作製)

日本各地に於ける縄文式文化の変遷 (編年比較表)

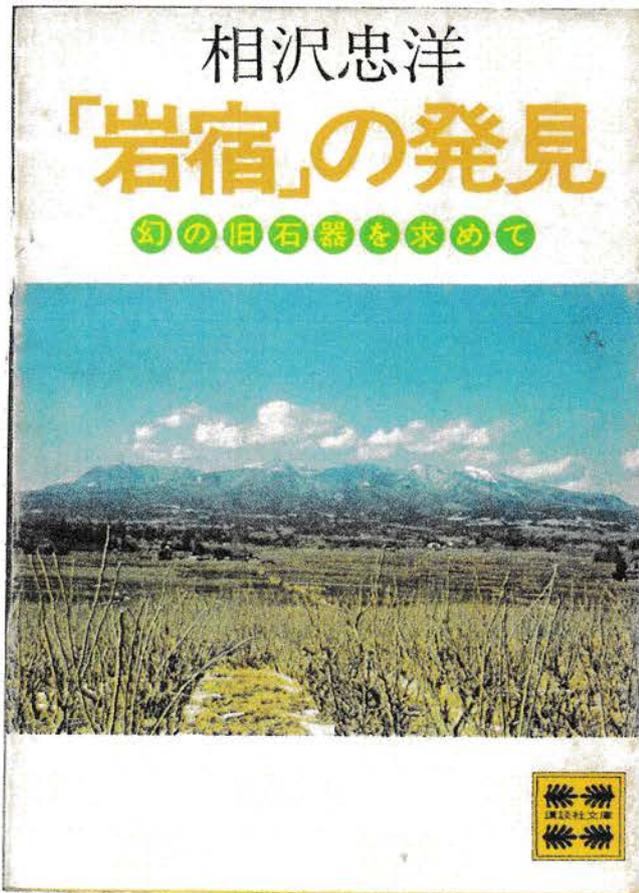
地域	北海道	北半島	奥羽北半	奥羽南半	関	東	新潟長野	東海	近畿	岡山広島	四国	九州	地域
時期	北渡島半	下北半島	フヨウダ深郷田	室浜素山(槻木2)	三ヶ月山	組名山	木島	石山	田中白坂				時期
早	春日町(石川野)	ノツコロ	高館苗場	常世館山	子母口花輪台?	上箱山	スセ山・村上	コウツ山寺	戰場ヶ谷				早
期	トド根法華	ムシリ	白浜	田戸上層(三戸)	田戸下層I	井草	行人原?		黄島	小蔦島	沈目		期
	住吉町	吹切沢物見台		田戸下層I	拜島								
					稻荷台								
					岩宿文化?								

戦後最初の縄文土器型式編年表 (1950年3月13日作成)

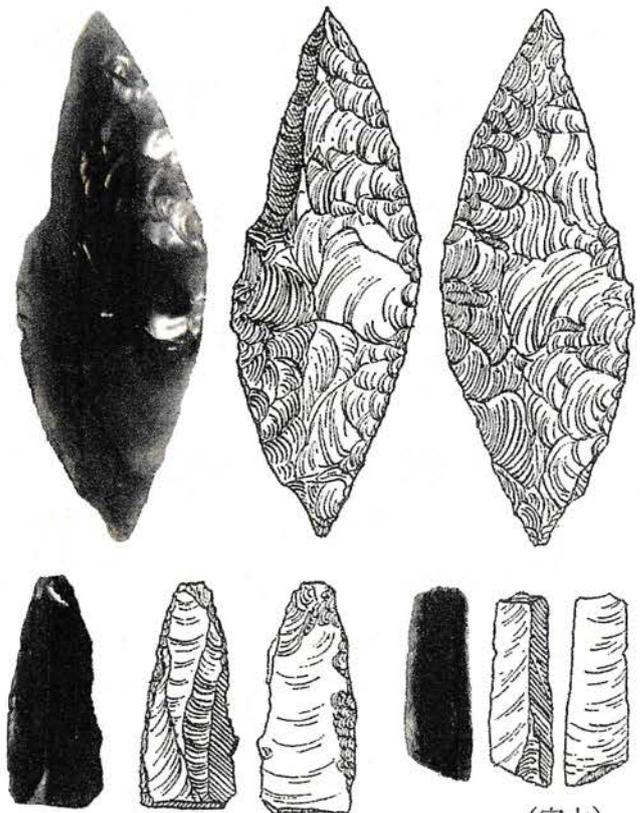
(江坂輝弥 1951「講座 縄文式文化について—前期—」『歴史評論』12-8)
* 稻荷台式が最古の縄文土器型式。岩宿遺跡第一次調査成果を組み込む。波線にも注目。



岩宿遺跡の位置 (国土地理院地形図：/25000 桐生)



講談社文庫 1973年 (講談社初版 1969年)



(実大)

相沢忠洋発見資料 (抜粋)

(写真：『岩宿時代』1992年) 実測図：芹沢長介
(実測図：『群馬県岩宿発見の石器文化』1956年)



岩宿遺跡 1949年9月の予備調査

(写真提供：明治大学博物館)



1949年10月の第1回本調査

(写真提供：明治大学博物館)

予備調査成果の報道 (朝日新聞1949年9月20日付)

旧石器の握槌

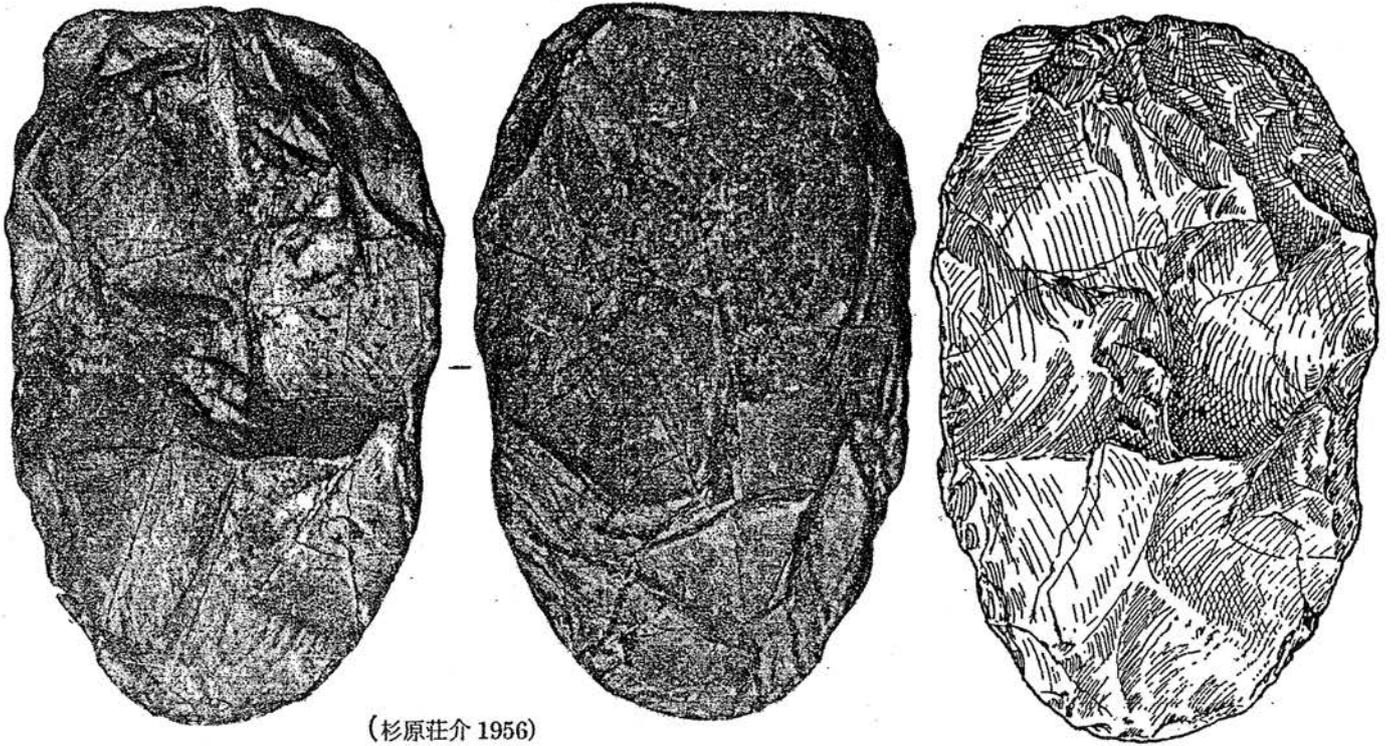
明治大学 助教授 岩宿 十萬年前と推定

この旧石器時代の遺跡に、岩宿、十萬年前と推定する握槌の発見が、考古学史上重要な発見として注目されている。この握槌は、石製の握柄と、木製の槌頭からなる。これは、旧石器時代の人類が、動物の骨や角を利用して、道具を作ったことを示している。この握槌の発見は、旧石器時代の人類が、高度な技術を持つようになったことを示している。また、この握槌の発見は、旧石器時代の人類が、狩猟や採集生活を送っていたことを示している。この握槌の発見は、旧石器時代の人類の生活様式や技術の進歩を明らかにする上で、重要な手がかりとなる。この握槌の発見は、旧石器時代の人類の生活様式や技術の進歩を明らかにする上で、重要な手がかりとなる。

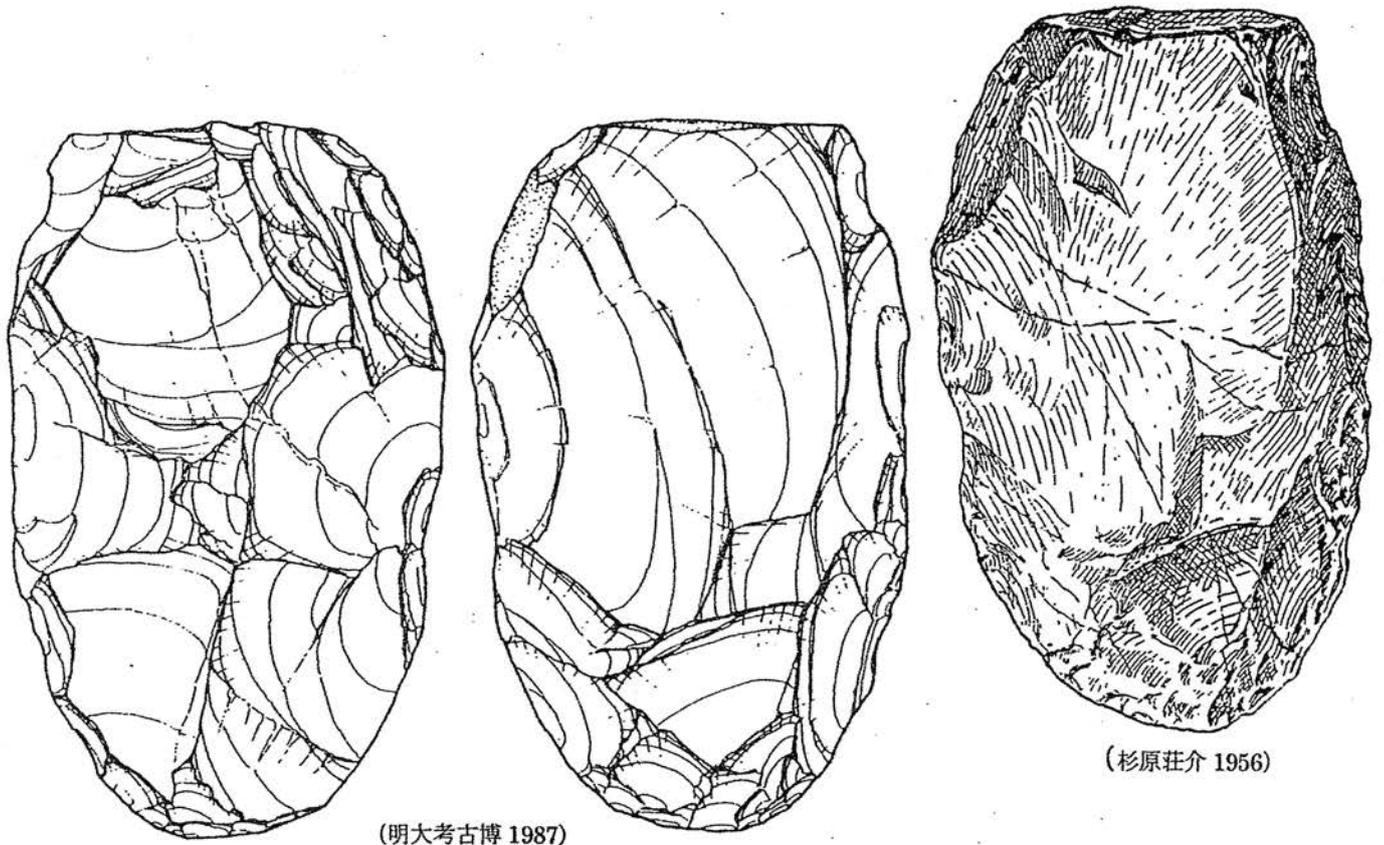
『新石器波来説』を覆す

岩宿遺跡の発掘調査で、旧石器時代の遺物が発見された。これは、新石器時代の波来説を覆す重要な発見である。この遺物は、新石器時代の典型的な道具とは異なり、旧石器時代の道具の特徴を有している。この発見は、旧石器時代の人類が、新石器時代よりも早く日本列島に到達したことを示している。また、この発見は、旧石器時代の人類が、高度な技術を持つようになったことを示している。この発見は、旧石器時代の人類の生活様式や技術の進歩を明らかにする上で、重要な手がかりとなる。

岩宿遺跡の発掘調査で、旧石器時代の遺物が発見された。これは、新石器時代の波来説を覆す重要な発見である。この遺物は、新石器時代の典型的な道具とは異なり、旧石器時代の道具の特徴を有している。この発見は、旧石器時代の人類が、新石器時代よりも早く日本列島に到達したことを示している。また、この発見は、旧石器時代の人類が、高度な技術を持つようになったことを示している。この発見は、旧石器時代の人類の生活様式や技術の進歩を明らかにする上で、重要な手がかりとなる。

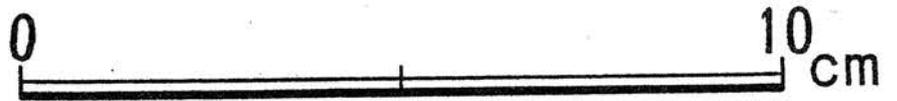
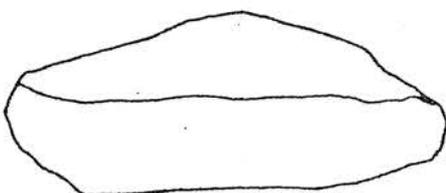


(杉原莊介 1956)



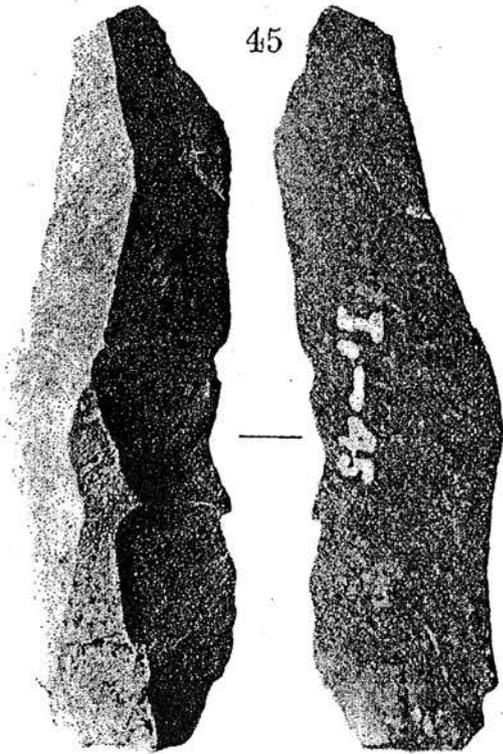
(明大考古博 1987)

(杉原莊介 1956)



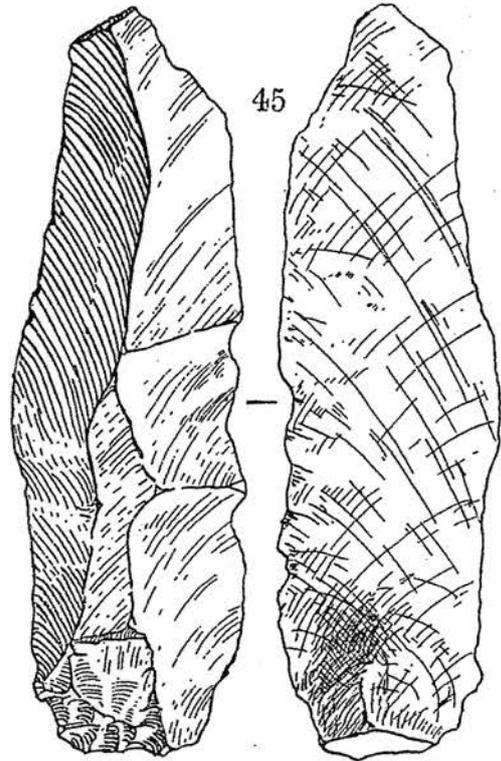
杉原莊介 1956『群馬県岩宿発見の石器文化』明治大学文学部研究報告(考古学)第1冊, 明治大学.
 明治大学考古学博物館 1987「岩宿遺跡」『明治大学考古学博物館展示図録』, 8-10頁.

岩宿遺跡出土石器の写真と実測図 2種(1)



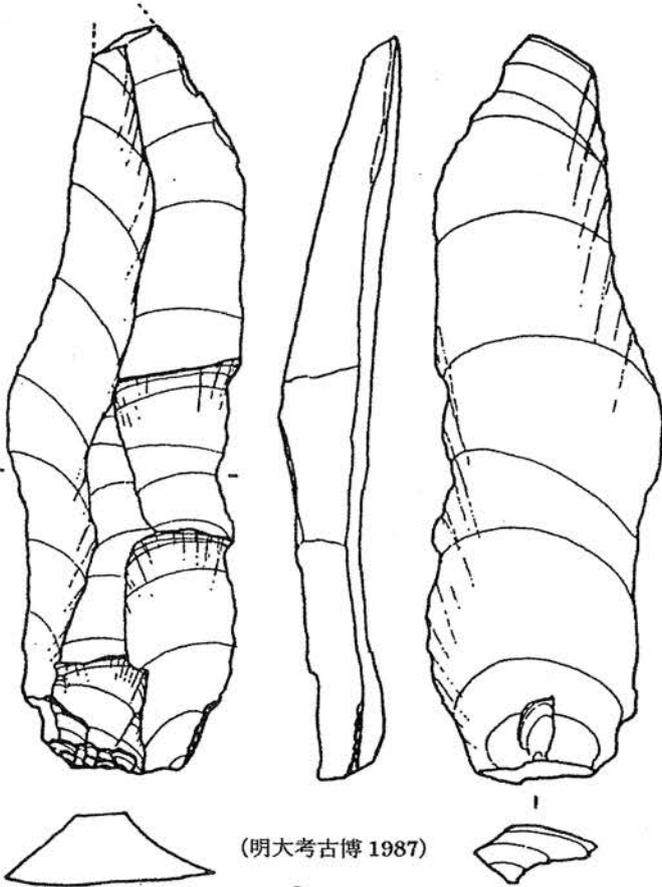
45

(杉原荘介 1956)

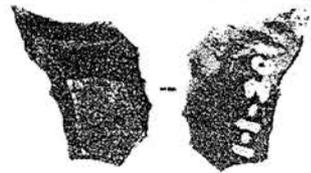


45

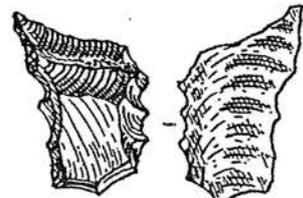
(杉原荘介 1956)



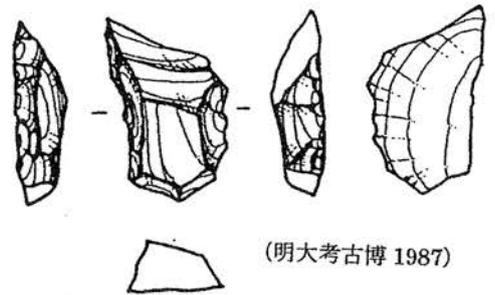
(明大考古博 1987)



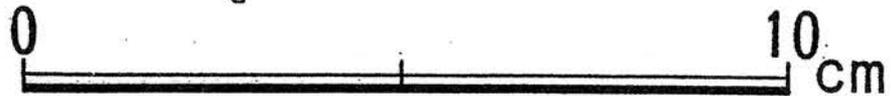
(杉原荘介 1956)



(杉原荘介 1956)



(明大考古博 1987)



杉原荘介 1956『群馬県岩宿発見の石器文化』明治大学文学部研究報告(考古学)第1冊, 明治大学.
 明治大学考古学博物館 1987「岩宿遺跡」『明治大学考古学博物館展示図録』, 8-10頁.

第一回の本調査中の昭和二十四年十月上旬のある夜、宿舍の国瑞寺本堂で、私たち十二名の明治大学学生は発掘された石器や剥片の整理作業をしていた。そこへ、一台のオート三輪車が到着し、下車したひとりの男性が本堂のガラス戸を開けた途端、大声で叫んだのである。「明治の学生諸君、こんなものは旧石器じゃない。発掘をやめて帰らたまえ!!」「杉原君いるか!! 芹沢君いるか!!」という。ロマンスグレーのどのおじさんだろう、いきなり失礼なことだと思っただら、その方が東京大学人類学教室の著名な縄文文化研究者、山内清男先生だった。この事件は、東京大学が明治大学に殴り込みをかけたようなものと後日笑い話となったが、岩宿の旧石器発見とは考古学上さまざまな問題を生じているものと深く感じたものである。

山内清男は否定

(大塚初重 2014『日本列島発掘史』)

いわじゅく-いせき 岩宿遺跡

群馬県新田郡笠懸村阿佐美岩宿にある無土器文化の遺跡。関東ローム層中から土器をともなわずに石器を出土する。昭和24年(1949)相沢忠洋がはじめて注意し、明治大学が発掘した。石器を包含する層は二つあり、上部のローム層(阿佐美層)は黄褐色、下部のローム層(岩宿層)は暗褐色を呈する。阿佐美層には切出形石器や尖頭器があり(岩宿Ⅱ)、岩宿層には握斧や縦長の剥片石器があった(岩宿Ⅰ)。この層位的事実は、以後の無土器文化の研究に一つのみとおしをあたえた。*関東ローム層が洪積世の地層であるというかぎり、これらの石器は洪積世人類の遺物である可能性が強い。(杉原荘介『群馬県岩宿発見の石器文化』明大考報1, 昭31) (小林)

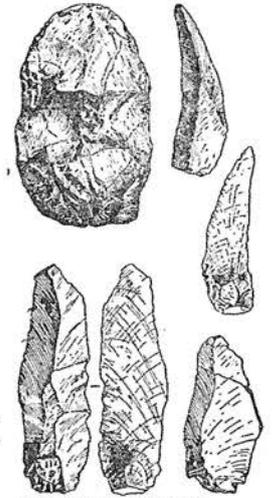
かんとろ-ローム-そう 関東ローム層

関東地方の洪積台地や平野周辺の丘陵地を被覆する赤褐色の砂質の粘土層。その厚さは場所によって異なるが武蔵野台地では数mにおよぶ。組成は安山岩や玄武岩など新期の火成岩であることから、富士、赤城、榛名、男体など関東周辺の火山灰が風によりはこぼれて堆積したもので、その堆積年代は、洪積世から沖積世のはじめにかけてであると考えられている。岩宿遺跡では土器をともなわない石器が、ローム層中に発見されることから、日本の旧石器時代遺物とされるが、沖積ロームも存在するわけである。なお、沖積世にはいととも、海進がすすむが、その海は関東ロームの台地上に樹枝状にくいいたわけである。ローム層上は土地利用上からは畑作卓越地であり、地下水面は深い。武蔵野台地の開拓がおくれたゆえんであるが、ローム層上の遺跡分布と地下水との関係の調査も重要であろう。おそらく原始人類は台地の崖端などに湧水点をもとめて住んだと思われる。(貝塚爽平・成瀬洋「関東ロームと関東平野の第四紀の地史」科学28-3, 昭33) (藤岡)

肯定と否定が並ぶ辞典 (水野・小林 1959『図解考古学辞典』)



岩宿遺跡



岩宿遺跡の石器(岩宿Ⅰ)

栃木県足利郡普門寺遺跡

所在地 栃木県(下野国)足利郡菱村普門寺観音山
調査期日 10月~11月。
調査者 園田芳雄, 地方青年有志。
調査概要 前発掘部の東隣に 3×6m の面積に亘り、主として地層とその包含状況について調査した。
第1層(表層) 褐色土に少しく腐植質の黒土を混じり、砂粒の包有量が下部より多く約15cm。
第2層(上層) ローム質土、まったく褐色を呈し、南関東のものと酷似する。70cmから90cmにわたる厚さ。これは杉原氏阿佐美層に当る。
第3層(挟入層) 厚さ平均35cm ぐらい、黒褐色を呈し、部分により甚しく硬い(杉原氏岩宿層)。
第4層(下層) ローム質土、上層とほとんど変りはない。その厚さに相当あるらしく、地表下2.50cm 迄におよんでいる。
遺物は表層および第2層上半までには、土師・彌生式・加曾利E式若干と諸磯式多数と含繊維土器、および沈線文系(田戸式類似)土器を包含している。

第2層(杉原氏阿佐美層)下部から第3層(杉原氏岩宿層)の上半部にわたって押型文(主として山形)および無文土器多数と若干の沈線・撚糸文土器とが包含され、第3層上部内に包含されるものは、押型文よりも無文土器が多い。第3層下半部にはまったく遺物は認められない。石器は第3層上半からも出土している。それらの中には、細石器的なもの(ラム状・石核状)、更に小さい後期旧石器類似なもの(シャテルペロンポアン・柳葉状ポアン・竜骨状石搔)等があり、以後の縄文時代の石器とは、技法及び形態において、少なからぬ特異点が見出される。

ローム質土中における遺物包含状況の実際については、桐生を中心とする約径20kmの範囲にわたって試掘を実施、その結果地層の状況はほとんど一様の順序であること、上部ローム質土から挟入層に達する範囲まで土器の包含される事実を確認することができた。

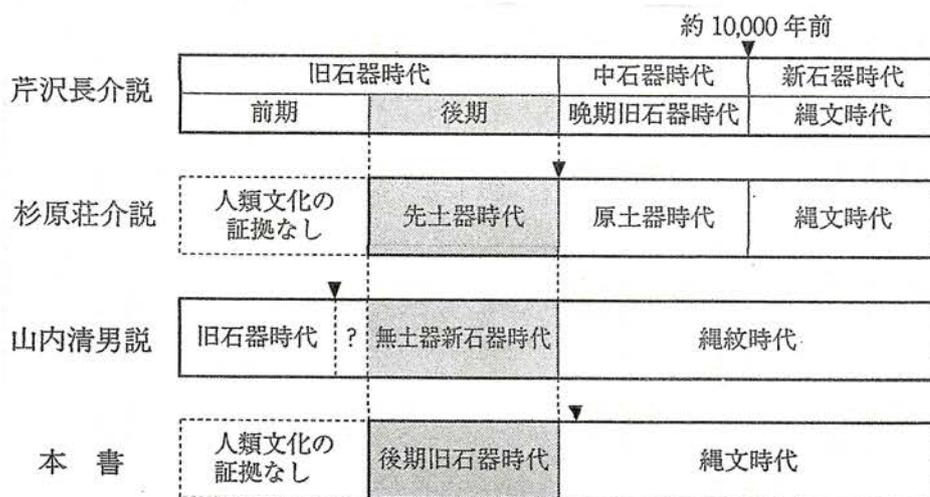
(園田 芳雄)

近傍の普門寺遺跡ではローム層から土器出土

(『日本考古学年報2(昭和24年度)』。この報文の次頁に杉原の岩宿報告掲載。)

時代区分		人類	第四紀地質年代区分		実年代	
鉄器時代		新人	完新世		10,000	
青銅器時代			後氷期			
石器時代	新石器時代		旧人	後期	ウルム氷期	40,000 80,000
	中石器時代				リス/ウルム間氷期 リス氷期 ミンデル/リス間氷期 ミンデル氷期	
	旧石器時代	原人	中期		500,000	
		猿人	前期	ギュンツ/ミンデル間氷期 ギュンツ氷期 ドナウ氷期	1,000,000 2,000,000	

考古学的時代区分・人類史・地質年代の対比 *新人=ホモ・サピエンス



岩宿遺跡の石器群をめぐる諸説 (石川日出志 2010『農耕社会の成立』)

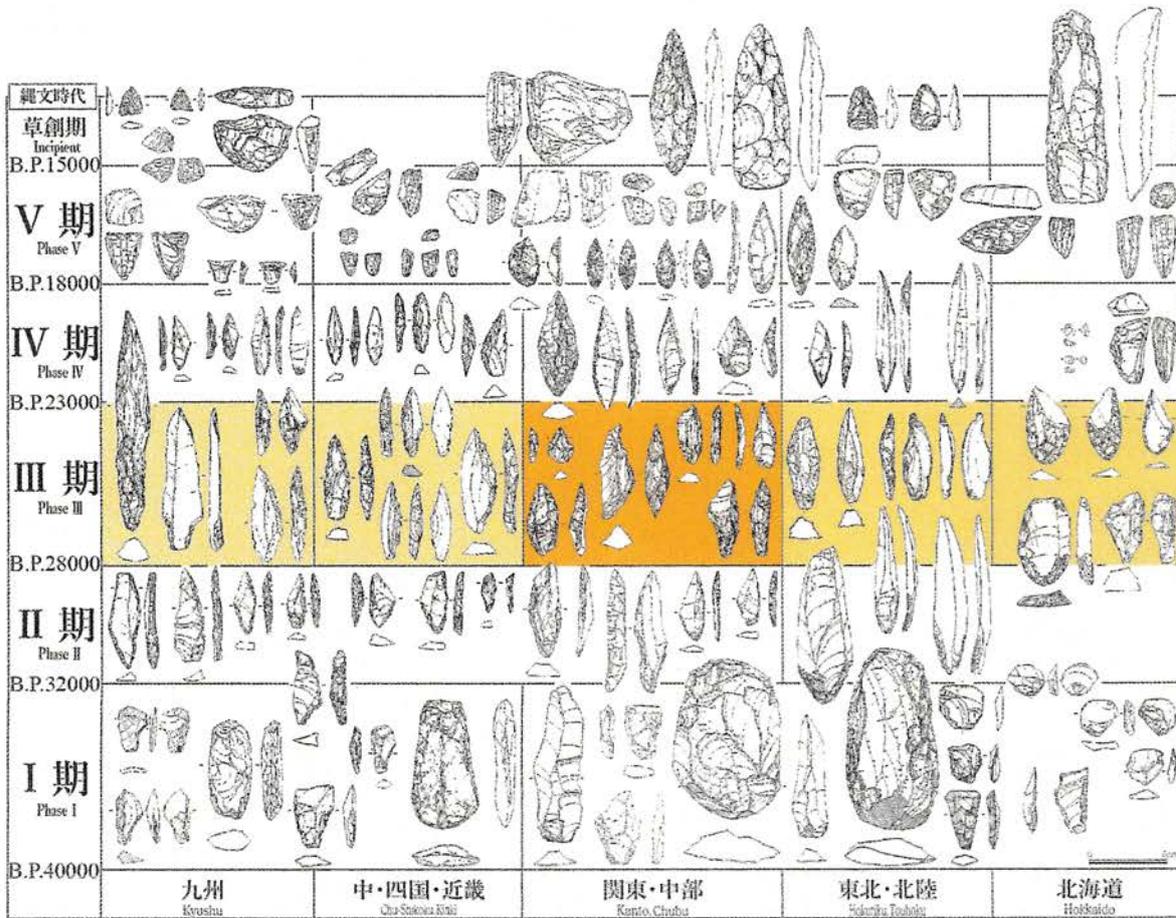


現生人類 (ホモ・サピエンス) の拡散に関する現在の考え方

(堤隆 2011『列島の考古学 旧石器時代』 / 海部陽介 2005『人類がたどってきた道』NHK ブックスを再編)

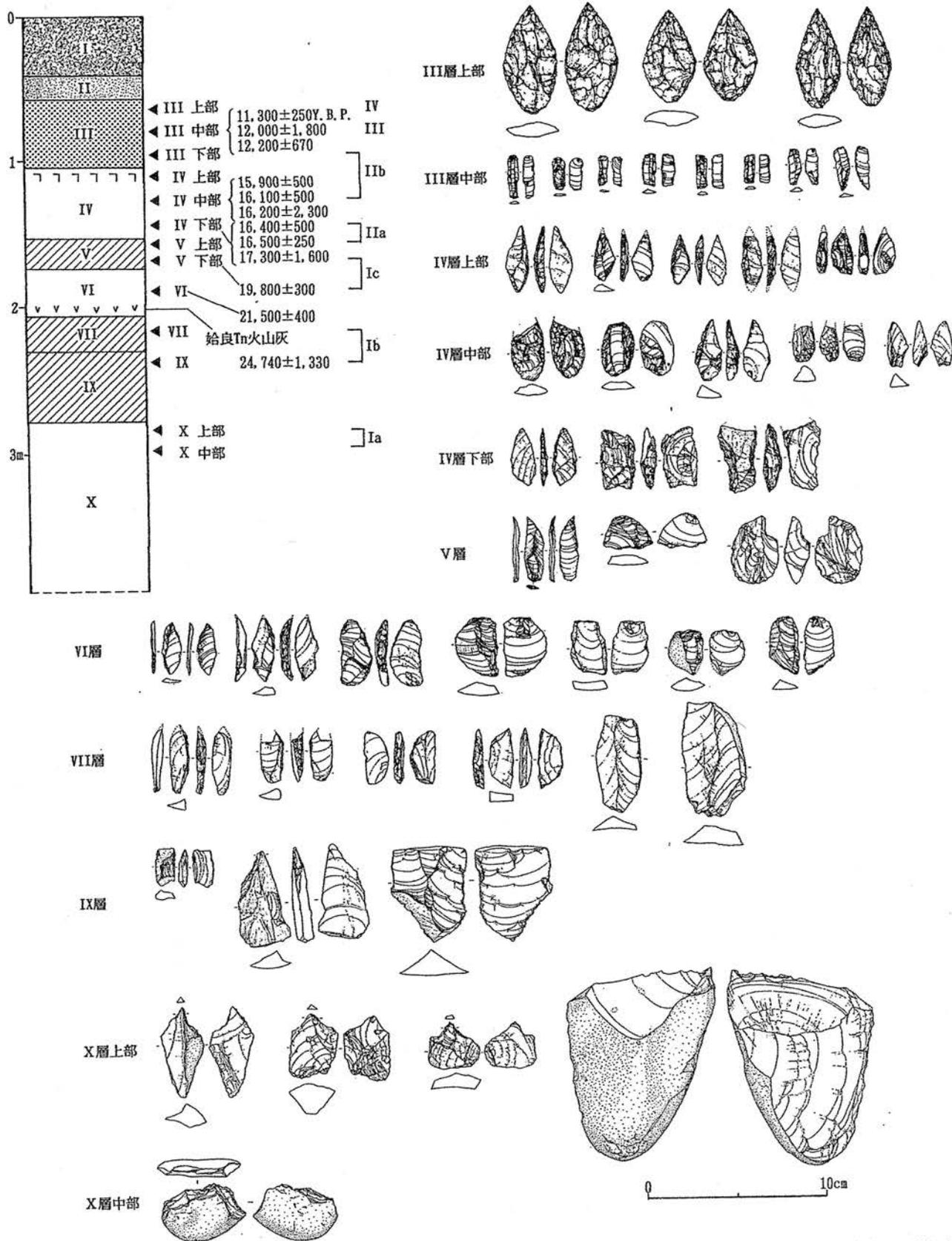


岩宿遺跡 A・B・C地点と岩宿Ⅱ遺跡 (国土地理院地図：桐生 1/25000 に加筆)
 調査当時は西側の谷に注目したが、現在は琴平山東側の谷頭をめぐる遺跡とみる。



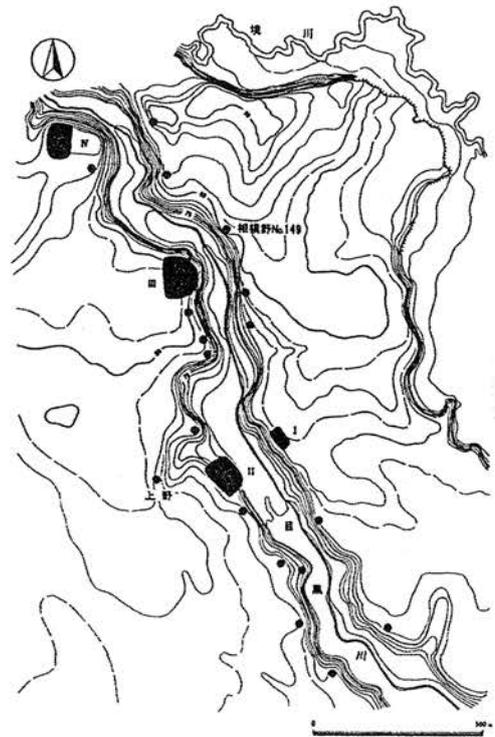
(岩宿博物館 2017 に一部加筆)

岩宿Ⅰ・Ⅱ石器文化は関東の後期旧石器Ⅰ・Ⅲ期の典型例だった

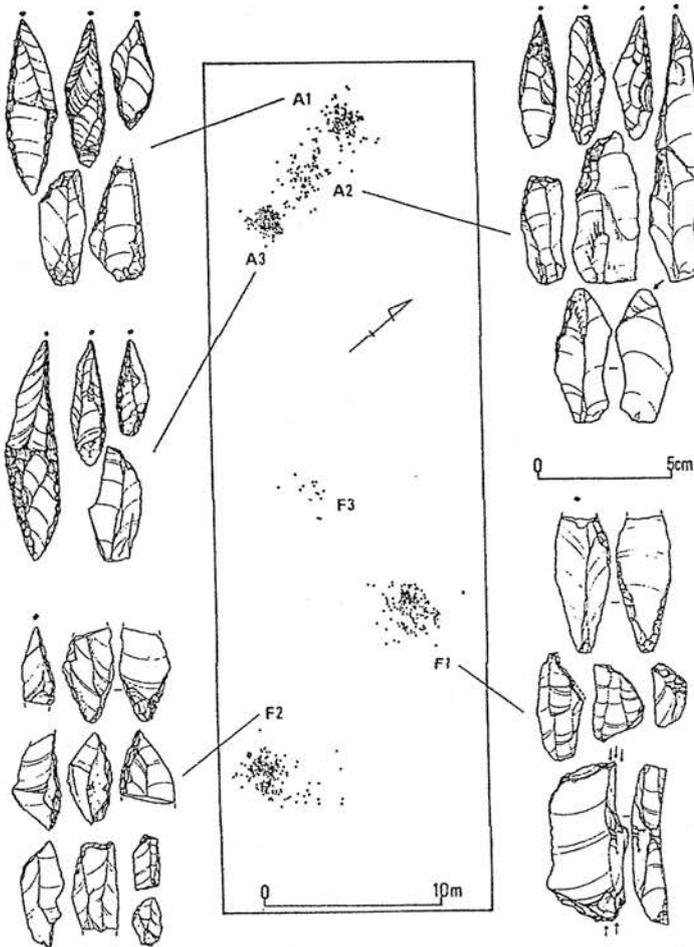


□ 西之台遺跡B地点の文化層の連続 東京都小金井市にあるこの遺跡は、立川ローム層の第III層から第X層にかけて遺構・遺物が集中する13の文化層が連続し、武蔵野台地で発見される石器群のほとんどをこの一地点で見ることができる点で、代表的かつ指標的な遺跡である。下層から順に、チャップパー、錐器、石刃状剥片、ナイフ形石器、細石刃、両面調整尖頭器が展開している。遺構として配石、礫群がある。

神奈川県月見野遺跡群

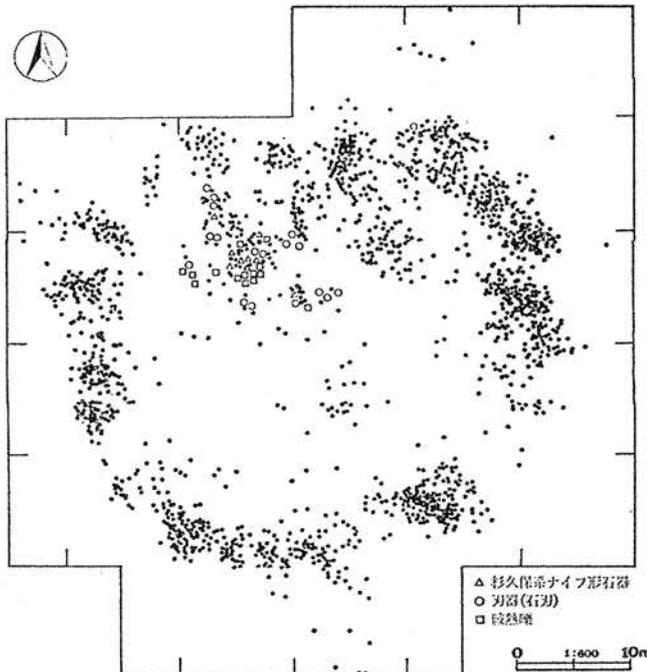
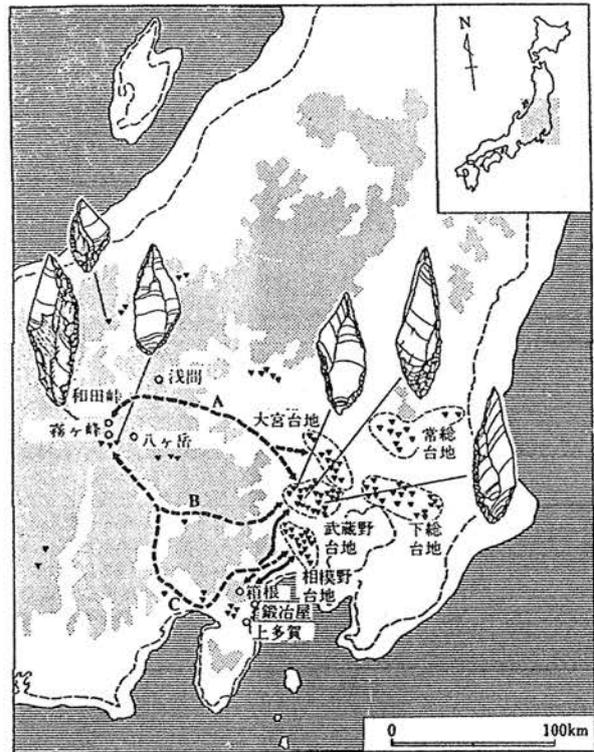


埼玉県砂川遺跡のブロックとその石器



(上・左とも『明治大学考古学博物館図録』)

中部・関東地方の推定黒曜石運搬ルート



環状ブロック群
(群馬県下舐牛伏遺跡)

(ともに『図解・日本の人類遺跡』)